

4. 黒部川上ノ廊下日誌

古 谷 精 宏

7月17日からの全体合宿（湯俣～三俣～槍～横尾）と穂高、滝谷の岩登りを終って、念願の昨年の黒部上の廊下退却のとりもどしを試みるべく、再び、黒部上廊下へ入った生活の行動記録である。報告書というよりも小生個人の感情の記録とでも思って読んでいただきたい。

8月1日。全体合宿及び我々のパーティ主体の穂高、滝谷の岩登りを終えて、いよいよ我々技術研究会のみになり、黒部の合宿のための用意を始めるべく大町へ夕刻に入る。松本の測候所の天気予報の問い合わせによれば、だんだん台風11号が近づきつつあるとの事だった。昨年の退却以来、装備、食料、黒部の資料と技術向上に心構けて来たこの一年間、4人のメンバーそれぞれ語らずとも、どうしても今年こそは黒部刻心部の溯行を完了すべく、気力は充分。我々の入山に黒部の山は勧迎してくれているのか、黒部第4ダム開通記念の花火が遠くに音もなく夜空に花をさかせては消えている。

8月2日。大町出 7:30 扇沢 8:20 雪渓下 9:35 マヤクボ出合 10:35
針木峠通過 11:40 南沢出合 4:00 ビバーク地 5:00

中野、増瀬、鈴木パーティは赤牛沢へ入った。我々小野、和田、三浦、小生の4人は黒部上廊下をやるべく、黒四ダムのさわがしい人々から開放されて、針ノ木の雪渓を登る。下沢小屋附近より、針ノ木の雪渓はガスが雪面にかぶり、幻想的な世界を創り出して美しい。3ピッチで針ノ木峠を下って南沢出合から少し平よりでビバークする事にする。

針ノ木谷の清流が涼しい音をたてて、我々の気持をやわらげてくれる。今日は峠をこえて昼寝をきめこみ、思わぬ時間を過ぎてしまったが、かえって上廊下への気持をたかぶらせる我々にとって、ある意味では良かった様だ。

8月3日。出発 5:50 平小屋 7:00 刈安峠 9:15 五色原雪渓 12:00
越中沢乗越 2:05 廊下沢乗越 3:45（ビバーク）

平の渡し舟（関電提供）で平へ、刈安峠を通過して五色への登りを3ピッチ、

五色の水場につく。五色は以前来た時はゆっくり景色も味えなかったが、今日はゆっくりと五色のゆるやかな斜面を充分にながめる事が出来た。

はい松が地面をはい、小さなミヤマなんとかが、可愛い顔でささやいてくれる。

それは五色までの登りの暑さを忘れさずに充分すぎるほどである。越中沢のピークまでは鳶山を越えると、ダラダラの登りである。我々は目的とする廊下沢乗越へ行くため、越中沢のピークを左にからんで道のないはい松のブッシュに突入。今まで、ほとんど人が入っていない場所、人にふれさせたことのない岩肌を地下タビの裏にびったりとすいつく感触を味いながら、岩から岩へ、飛び石づたいに進む快適なトラバースである。

廊下沢乗越は少々の雪渓を残し、小型テント一張の設営以外不可能であるが、最高のテント場で絶好のビバーク地である。

このビバーク地からは、グリーンのジュータンを敷つめた様な五色原はもちろん、立山、烏帽子をはじめ、赤牛パーティが頑張っているであろう赤牛沢も良くみえる。上から見る廊下沢は平凡な沢の様だが——果してどうなっているか、明日が楽しみだ。今日も又、空は満天の星空。

8月4日。出発7:15 ブッシュを抜けた右岸の河原 8:00 黒部川出合 9:55 スゴ沢出合 10:50 ビバーク。

4:30 起床、29日の月が細くかかり、五色原が目に入ってくる。我々のビバーク地を7時すぎ出発、廊下沢を下る。乗越より南側は赤牛岳、薬師岳、野口五郎岳、雲の平が緑のビロードを身にまとい、白い雪の飾りをつけて、うまく調和して心にくい。一時間程の1ピッチはすごいブッシュでどんどん下る。そして広い石のつらなる川原に出、2ピッチで廊下沢を下り、いよいよ待ちかねた黒部川の河原に立つ。

今年の黒部上廊下核心部の溯行は、昨年天候の悪さで退却して以来の計画であった。そして、そのメンバーに私も加った。今、私は黒部川上廊下にいる一。

廊下沢と黒部川との出合は黒部上廊下中でも広い河原で、今年は水量も少なく、我々は第1昼食後、すぐスゴ沢の方へよって行く事にした。スゴ沢の落口

までに2度の渡渉、腰までぐらいの渡渉だがすごく冷たい。特に痛い様な冷さで足がしびれる様にすら思えた。スゴ沢出合を越えた所でビバーク。

時間は早い、明日は本番。小野氏と和田氏が偵察に出る。上流 20 m ほどより先は黒部特有の廊下が兩岸にそそり立ち、明日の苦勞がわかる様な気がする。

小野氏が黒部に取り組みだして以来、我々探検部の技研も又、黒部流域の踏査という目標と共に成長して来た。

彼は今、ヒゲズラの顔に、ある種の興奮と淋しさを浮べながら、去年の退却の事、今年の水量の無さを語りつづけていた。

8月5日。晴。出発 7:45 金作谷出合 1:10 ビバーク

今、私は金作谷の落口のビバーク地で夕食後タキ火に暖を取りながら、この日誌を書いている。出発してこの金作谷のビバーク地着が 1:10、この間、全く自然との斗いであった。

朝、太陽のささぬ黒部の水は言語に絶するほどの冷さである。腰まで水につかりながら奇声を発して対岸に向う。水量と、冷さと、流れの早さに我々の足にぶる。一度、二度、三度、回を重ねるごとに体の冷さ、寒さはこたえる。岸の上にはい上っても足のふるえがとまらない。目でわかるほどにふるえる。兩岸は全くの岸壁で、ずばぬけてスケールがでかい、そして滝状のルンゼの下をくぐる。頭から冷水をかぶる。しかし、我々は前進しなくてはならない。ハーケンを打つ。トップ小野氏、私の番だ、手がしびれてカラビナをつかんだ手に力が入らない。前進、ハーケンが抜ける。1 m あまり下の黒部へザンブリと頭までつかる。岩の上にはい上る。服をかわかすまもなく、又前進、寒さとの斗いだ。

渡渉 8 回、岸づたいに水の中を歩くのを含めると、少し歩いては水の中への連続であった。そして最後の渡渉時はザックを背って岩の上にはいあがれず、すごい苦しみを味う。長く水の中に入っていると全身がしびれる様にすら思える。そしてついに金作谷出合にたどりついた。その間、4 時間あまり。

我々は勝った。黒部上廊下核心部と言われる上の黒ピンカより金作谷出合ま

での溯行をやったのけた。高巻もせず、正面ずもうを黒部川とやったのである。黒部の夕暮は早い、せまい夕闇の夜空はバラ色に移り変り、沢のはげしい音と、パチパチとなるタキ火の音のみ……。何んという静けさであろう。今日一日をふりかえて、何んと充実した一日であったことか、だれもこの冷たい流れの中を渡れといった人がいたわけでもない。しかし、そこに我々探検部としてのパイオニア・スピリットがそれを行わした。真赤に燃えた情熱がこの黒部の氷の水にうちかった。その代償は何もない。しかし己が心のこの充実感は何んの代償よりも尊く、清いものであるはずである。私はこの心の中にうずまき満足感で充分すぎるほどの歓びを感じる。

昨年、涙をのんだ小野氏にしてみれば、この歓びと淋しさは人一倍であろう。互い何も言うまい、己が心で一夜の夢をシュラフの中であたためよう。

8月6日。晴。夕刻より雨、出発7:00 廊下をぬける7:40 赤牛沢出合11:15 立石岩小屋12:00

前日より少し明るくなった黒部川をさかのぼる。しかし廊下は前日同様続いている。渡渉もやるが、ほとんど右岸に沿って進む。2479 mピークから源を発する沢を、そのまま横ぎり、左へ曲ってゆくとどうやら廊下も終りの感になる。

その後もほとんど右岸通し、赤牛沢の手前で左岸に渡渉、赤牛沢出合で右岸に渡渉、赤牛沢の落口の滝をながめながら、赤牛パーティの苦労を想う。少し行って左岸に渡渉、奥のタル沢の出合で右岸に渡渉、立石の岩小屋におちつく。

立石の岩小屋に入って夕刻、めしを食う頃になって雷雨になった。なかなかやみそうにない。しかし考えてみると黒部川核心部の溯行が終了していて本当によかったと思う。明日は読売新道づたいにゆく予定だ。

我々の黒部の溯行はほぼ終了した。我々は黒部の大自然に斗って勝った。しかし黒部は何も語らず、今日も明日も、いつもと変ることなく、時に静かに、時に雄々しく流れていることであろう。それが自然の偉大さであり、人間の何んと小さい存在であることか。

岩小屋から雨にけむる、夕刻の奥のタル沢は深い緑でジメジメしていやな気

持た。全体合宿以来、晴天続きの合宿も今日に至って雨となる。明日には我々が通って来た上廊下核心部も水位がふえて通過不能になってしまっているのではなかろうか。我々は幸いであったと言えるだろう。

雨したたる岩小屋で、かつては冠松次郎氏ら黒部バイオニア諸氏の泊られたであろうことを思いながら、一夜の夢をむさぼろう。

8月7日。雨。出発8:00 立石通過8:30 薬師沢出合12:30 雲の平
祖父沢源頭3:30(泊)

読売新道はわりとはっきりしていた。2度の渡渉があったが、その他は皆、右岸通しに行く。黒部の谷もますます広げ、他の沢と変らない様になった。

12:33 薬師沢出合着。「ゴツァンデ」 上廊下溯行完了の代償がこの言葉である。2ヶ年にわたる上・下廊下完全溯行はこの言葉と共に終了した。1:30 出合出発して雲の平のテント地へ向う。

8月8日。曇時々雨。出発6:20 黒部、奥のタル沢分水点6:50 鷺羽
乗越との合流点附近7:40 三俣8:50 湯俣1:00

祖父岳をまいて黒部源流を下る。コルより下る所はお花畑で露にぬれてすごく美しく、清らかな感じがする。三俣より全体合宿で登った道を今日は下って湯俣のテント地へ下る。

8月9日。雨のちうす曇。6:20 湯俣出発、濁小屋8:10、葛温泉着11:00
雨の中を葛へと向う。我々は成功した。黒部上廊下核心部を。

そして、それを終えた今、私はこの温泉宿で窓越しに青々と茂る若葉を見やりながら、何故か以前読んだこんな詩を思い出していた。

渇き 谷川俊太郎 作

水に渇いているだけでないのです

思想に渇いているのです

思想に渇いているだけでないのです

愛に渇いているのです

愛に渇いているだけでは足りないのです

神に渇いているのです

神に渇いているだけでないのです

何に渇いているのかわからないのです

《水を下さい水を》

あの日からずっと渇きつづけているの

です

山行を終えた今も又、山は、黒部は北方と同じ様に入々を迎えていることであろう。又、山にこがれて、山にこよう、それが明日の糧となるであろう事を信じ、求めて――。私もまた、山へ行こう。完

Ⅲ．黒部川支流

1. 赤牛沢（昭和39年8月）

中野力

昭和39年の技研夏期計画は全体合宿の後、穂高での定着合宿と黒部川の溯行であった。穂高では快調に計画を消化し、松本にて準備をする。

険悪な滝、急峻な壁の小さなテラスでのビバークなどを夢想しながら、ビトン・カラビナ等の装備の準備には万全を期した。二度目の挑戦をする上ノ廊下隊も食糧計画は慎重だ。台風の接近が気になり松本測候所を訪れ説明を聞いた。

8月2日 晴れ

大町バス停を飛び出し湯俣へ向う。途中大出の追分商店へ連絡に寄る。懸念していた台風がどうやら逸れたのか、太陽の猛威が容赦なく我々の頭上におそいかる。七倉にて昼食をとり気合もあらたに歩きだした。だが三人共足どりは決して快調ではなく、2時湯俣に着く。

8月3日 快晴

三俣へ向う。今日は枕木こそないが、相変らぬ炎天だ。地下足袋をつけた足の裏が少し痛い。伊藤新道の景色をたのしみながら歩くうちに三俣蓮華にきた。時間はたっぷりあったが、黒部川の最源流雲の平分岐に設営することにする。昼寝をするが、足元を通るワンダラーがにぎやかだ。

8月4日 晴れ

ツェルトの隅から有明の星が黒部五郎の上に輝いていた。シュラフを持たない身には寒ささえ感ずる朝だった。岩苔乗越から高天原を経て奥のタル沢出合までが今日の行程だ。岩苔乗越からは新しい登山道を通して高天原に出る。ク